

## 能『井筒』と中世伊勢物語古注釈

——「待つ女」等の解釈を通して

### 一、はじめに

現在の『井筒』が、薄の生える古寺を舞台に、生前も死後も業平をひたすら「待ち」、形見の衣を身につけて舞う美女の姿を見せるものであることは皆納得して頂けるように思う。人を「待ち続ける」情念、「待つ」美しさが舞台に結晶しているのであり、井筒のものと「幼な恋」、結婚後の「高安通い」の物語も、女の「待つ」姿の一部と捉えられているのである。有常娘は、舞台上では美しい存在、しかしながら「待ち続ける」不幸な女と捉えられる意味で、生前・死後を通して「悲劇の女」として見られることが多かったのではなからうか。

中村格氏<sup>1)</sup>は、室町末期の伝書の吟味から、室町末期に於いてシテの有常娘が十寸髪<sup>1)</sup>の面をかけ、カケリを働く演出があったことを報告された。そしてそこから、

狂乱の十寸髪面をつけ、翔りを働くといい室町末期の『井筒』

飯塚 恵理人

は、井筒の女の業平への恋情の狂ほしき、ついには高調して、男に乗りうつり、

さながら見えし 昔男の 冠直衣は女とも見えず 男なりけり

と舞う狂う陶酔の姿態を現出せしめるところを眼目にしたものといえるのではあるまいか。しかもそれが、たんなるきれいごとだけではなく、井筒の女の恋慕の執心、それゆえの罪深さ・哀れさという視点から捉えられていることは、詞章内容の語るところでもある。つまり、室町末期の『井筒』は、今日の可憐に美化された曲趣としてではなく、より根元的な、人間の情念・罪業の深さともいえるべきところから発想した曲として受容されてきたのではなからうか。

と、「井筒」を「人間の情念・罪業の深さ」から発想された曲であるとされる。

「井筒」の素材となった世阿弥時代の伊勢物語理解において、有常娘が、業平を待ち、その結果死んだ女であると理解されていたと

最初に主張されたのは堀口康生氏である。これは二四段の「真弓櫓弓年を経て」の語が有常娘の口から自らの生涯の一部として語られることよってである。この二四段を「井筒」の背景とすることによって、堀口氏は、

夫への変わらぬ愛をいだきつつ、じつと耐えて待ちつづけた女、待ちわびてふとした心の隙間にはいりこんだ風に、愛する夫の心をついにとどめかねて、清水のほとりに果てる女。彼女はまさしく「待つ女」として「井筒」に形象された。死してなお業平のおとずれを待つて、みずから形見を着して舞う女の姿を理解するには、やはり、第二四段の「待つ女」の悲しい運命を、その一助とすべきであろう。

という悲劇的な有常娘像を提唱された。

また伊藤正義氏は、「井筒」の背後には、「有常娘物語」とでも言うべき、有常娘の一代記の物語が存在するのではないかと主張された。伊藤正義氏の論をあげると、

《井筒》は『伊勢物語』二三段を中心に、一七段、二四段の話を合わせて作られている。それらはすべて業平と紀有常の娘のこととする中世の『伊勢物語』の理解に基づくものであり、現代の『伊勢物語』理解とは大きなへだたりがある。(中略)かくて『伊勢物語』の右各段をつないだ紀有常の娘の物語とは、筒井筒の昔より業平との結婚を待ち、結婚後は高安の女へ通う夫のわが許へ帰るのを待ち、三年間の空白を桜とともに待ち、三年目の夜、業平を追って、追い続けて息絶える。

となる。堀口氏・伊藤氏の言われる「有常娘物語」を「井筒」題材に想定すれば、この「井筒」の背景にある有常娘像は、「業平を待ち続けたにもかかわらず、二人の結婚は結局のところ破綻し、死に

いたるまで業平にかえりみられなかった」と言うものになり、「井筒」のシテは、このようにして死んだ過去の亡霊として業平を「待ち続け」たまま、舞台の在原寺に登場することとなる。

両氏の説は、いうまでもなく中世の伊勢物語の注釈に拠るものである。しかし、あらためて古注釈の資料を再検討すると、そのまとめられた物語内容には、いくつかの疑問が浮かぶ。

そこで本稿では、『伊勢物語』の世阿弥時代の理解を古注釈を頼りに再検討する。そしてこの『井筒』の背景となった有常娘物語から世阿弥が有常娘像をどのように構成したのかを検討する。

「井筒」が引用している伊勢物語の章段は、前述の通り一七段・二三段・二四段である。このうち二三段は「幼な恋」の二人が成人して結ばれ、男が一旦高安の女の所へ通うようになるが「風吹けば」の歌にめでた高安へ行かなくなるという「歌」によって純愛が回復する章段であり、そのことについては先行のどの論文でも異論はない。

そこで世阿弥当時の『伊勢物語』の理解については、『伊勢物語』の章段の内、有常娘が「待つ女」と呼ばれる理由となる一七段と、有常娘が堀口氏・伊藤氏によつて「息絶える」と解釈されている二四段を検討する。考察の順序は、「井筒」での引用順序を変えて、二四段からとする。これは、二四段が堀口氏・伊藤氏によつて有常娘の最期が読みとれるとされた、有常娘像を考察する上で極めて重要な段であることによる。

## 二、真弓櫓弓年を経て

伊勢物語二四段は、「三年間男を待つていたが、待ちわびて」ね

むごろにいひける」人と「新枕」をかわすこととした。その晩もとの男が帰ってきた。男は女をあきらめ帰ってゆくが、女はもとの男を追って清水のもとで「いたづら」になる。」という内容の話である。堀口氏・伊藤氏は「真弓槻弓」の歌を本の男が女に、新しい男に親しむようと言って与えた歌と理解し、「いたづらになる」ということを、有常娘がおのれの運命に絶望して業平を追いつけて死んだと考へておられる。この説に対し、八寫正治氏<sup>4</sup>は

24段の悲恋の面影が「井筒」に於いては全く用いられぬ点等、世阿弥の純愛をうたい上げる主題意識は、本説と微妙なバランスを保ちながらも確かである。

と、西村聡氏は

「真弓槻弓年を経て」は、歌の一部でしかなく、「年を経て」だけの内容しかなく、しかも男の歌であつて女の歌でない。もっと重要なことは、二十四段の女主人公が夫に去られて死んでしまふことで、そのような劇的な、それだけで一つの戯曲が成り立つ展開を、引用された歌の一部に読み取つてよいのだろうか。と反論されている。八寫氏・西村氏とも、「真弓槻弓」が「歌の一部」であり、そこに二四段の世界が投影されていると考えることを無理とされている。しかしながら、この「真弓槻弓年を経て」の言葉が、有常娘を通して「我筒井筒の昔より」と「われ」一代の回想として書かれていることを考えれば、作者はこの「真弓槻弓」の歌に府会された、当時の二四段のこの歌の理解も、有常娘の一生の一部として読まれるであろうことを意図していたと考えられる。問題は、「真弓槻弓」の歌の背後にある二四段の作品世界が、世阿弥時代にどのように捉えられたかである。

「真弓槻弓年をへて」の歌は、伊勢物語研究の現在の解釈では「新

しい相手に親しむように」と求めた歌とされている。確かに「伊勢物語難義注」<sup>5</sup>では、

いまにひまぐらのをとこ、つるのやうにひかば、弓のやうに、たをやかにして、したがひよれといふ心也。又我せしがごととは、今の新枕にも、我にあたりしやうにうるはしくあたれをいふこゝろなり。

と「相手に親しむように」と求めた歌と理解している。世阿弥以前にこのような理解が存在したことは事実であるが、当時は別の解釈が流布していた。これは「知頭集」「冷泉抄」に見られる。まず「知頭集」<sup>7</sup>は、

わがせしかごととは、ちぎりなり。うるはしみせよとは、ちぎりたがへたれば、かへりなんす。そのちぎりをもとのやくそくのまゝにせよ、とゞまらんといへる也。あるものには、このかごとは、ちかごと也といふ説もあり。

と、業平が有常娘に復縁を求めた歌とする。また「冷泉抄」<sup>8</sup>では

○我せしかごとうるはしみせよとは、かごとと云に、二一の義有。常にはむつごと也。是はちかごと也。(中略) ○と云て出なんとしけるとは、女のうけじとてござりければ、業平出ていなんとしける時、女哥をよみてとゞむ。

と「かごと」を「ちかごと」とする。この「ちかごと」が「誓言」と理解されていたことは、「冷泉抄」と同じ冷泉家流の注釈書である「十卷本伊勢物語抄」<sup>9</sup>に

ワカセシカコトウルハシミセヨトハ 互ニ異心アラシト 誓言<sup>チカヒコト</sup>  
シタリシヤウルハシミセヨト云也 カコト、云ニ一ノ義アリ  
ツネニハタ、昵言<sup>ムツヤシキ</sup>ナントヲカコト、云是ハ誓言也

とあることより伺われる。

「冷泉抄」によれば、業平の詠んだ「真弓槻弓」の歌に対し、「うけじとてござりければ」と、女が歌の呼びかけに応じなかったの  
 で「出ていなん」と業平が出て行ったとする。この歌の内容が「相手に親しむように」という呼びかけであるならば、「うけじとてござりければ」ということはありえない。このような解釈からも「冷泉抄」は、この歌を業平が有常の娘に復縁を迫る歌ととっていたと考えてよからう。「伊勢物語愚見抄」も

この歌のかごとは、ちかふこと、きこえたり。うるはしみせよとは、うるはしくおもへと也。歌の心は、君に心のひきて、年月をかさねしかごとをば、うるはしくおもはで、又こと人に見えんとするとよめるなり。(中略) 夫婦の中のながくかはらじとたがひにちぎる事をも、みな、かごと、いふべきなり。と復縁を迫った歌と理解しているのである。

つまり、世阿弥時代において、『伊勢物語』の「真弓槻弓」の歌は業平が「新枕」をしようとした有常娘に復縁を求めた歌と理解されていたことになる。そして二四段の話においては、その歌に託した業平の思いを有常娘が聞き入れようとしない様子だったので、業平は有常娘のもとから帰ったのだと理解されていたことになる。

堀口氏・伊藤氏が二四段を有常娘の死を意味する段とされたのは、『伊勢物語』の二四段に女が「いたづら」になったとする記述があるからである。「いたづら」が女の歌の「我が身は今ぞ消え果てぬめる」という句を受けているとすれば、この歌の引用は女の死を意味すると考えるのが自然であろう。しかしこの「いたづら」についても、世阿弥当時は現在と異なった理解がなされていた。例えば「冷泉抄」は、

○そこにていたづらに成にけりとは、死たるには非ず。業平の

ふり捨て行を見て、いたむまじきかほになるをいふ也。されば、いたづらなり。

と「いたむまじき顔」になることと理解する。しかし「いたむまじき顔」という語は意味不分明である。「十卷本伊勢物語抄」はこの部分を

ソコニ徒ラニ成ニケリトハ死タルニハ非ス業平ノ振捨テ行クラ見テ痛シキカホニナルヲ云也サレハ痛面也

とし、「いたづら」に「痛い面」の字をあてて「痛ましき顔」と理解する。「冷泉抄」の「いたむまじき顔」の「む」はえん入であり、「冷泉抄」の本来の本文は「十卷本伊勢物語抄」と同じく「いたむしき顔」であったと考えるのが妥当だろう。「いたづら」が「痛ましき顔」のことであれば、有常娘はここで業平をとどめかねて悲痛な顔になったという意味となる。いずれにしても、世阿弥時代に二四段を有常娘の最期が書かれた段と解釈しない説が流布していたことは確かであろう。当時の享受者が『井筒』の「真弓槻弓年を経て」の和歌の引用の背後にあると理解していたのは、業平と有常娘が、お互いに浮気をしたこともあったものの歌によつて愛情をとどめあった年月を過ごした事であると考えて良いように思われる。

### 三、年に稀なる人も待ちけり

次に有常娘が「待つ女」と呼ばれる原因となる一七段について吟味する。従来の研究において「待つ女」は「待ち続ける女」の意で理解されている。この「待つ」という言葉は、前シテの出の「いつまでか、待つことなくてながらへん」と有常娘が自らの境涯を嘆くセリフと、後ジテの出の、有常娘が「徒なり」との歌によつて「人

待つ女」と呼ばれたとするセリフの二箇所が存在する。この有常娘が「待つ女」と呼ばれることは、有常娘が「井筒の女」と呼ばれることとならんで、能『井筒』のシテ像を大きく決定する要素である。この有常娘が世阿弥当時一七段の「徒なり」との歌の作者であり、それゆえに「待つ女」と言われたと理解されていたことは、『五音下』の「葛ノ袴」の本文に

神勅ニシタガイテ知頭集ヲ開ケバ、(中略)第一番ハタレヤラン、ヘアダナリト、名ニコソ立テレサクラ花、ヘトシニマレナル人モ待チケリ、ヘ此歌ノ主ヲバ、人待ツ女ト書キタリシヲ、ヘ紀ノアリツネガムスメト、アラウスハ尉ガ僻事。

とあることから知られる。「尉ガ僻事」という言葉は、尉が明らかにした「秘伝」の内容が違っていると、自ら言っているようにとれなくもない。だがここは、引用部分の前の詞章に業平の「馴レニシ人」の「名字」が、「秘スル所ノ言ノ葉」の中でも「コトニ憚リ多キ」とされることが参考となる。これが前の文脈を受けた表現であるとすれば、尉の言う「僻事」とは「秘伝」の内容ではなく、この大事の「秘伝」を言葉に表して伝授してしまう行為をさしていると考えざるべきであろう。「葛ノ袴」では、尉が『業平の第一の妻は「人待つ女」と言われた有常娘である」という「秘伝」を明らかにしてしまうのは軽率な「僻事」だったかためらいながら重々しく語っていると読むのだが、これが謡物である以上、この内容とする「秘伝」は当時一般的な伊勢物語理解に拠っているものと言えるだろう。また「知頭集」には

さくらに人まちえたる女 有常がむすめ  
とある。金忠永氏は、

この「人待つ女」というあだ名は、書陵部本『知頭集』の巻末

に、『伊勢物語』に登場する女性を列挙してその素性を明かしている項目の中に、「さくらに人まちえたる女有常がむすめ」とあるのによるようである。「人まちえたる女」という名は、「まぢえたる」とあることから、この歌によつて業平の訪れを得ることのできたという意と解せる。ところが世阿弥はそれを「人待つ女」としている。

と、当時有常娘は「待ちえたる女」と理解されていたものを、世阿弥が「待つ女」というようにその性格を変えて「井筒」にとり入れたとする。この金氏の説によれば、世阿弥が「待ち得たる」と「待つ」という似た言葉を用いながら、古注釈の有常娘像をかなり大きく変えて受容しているということになる。

「待つ女」と「待ちえたる女」という言葉はどちらも一七段の「徒なり」との歌の言葉である。「待つ女」の「待つ」は「年に稀なる人も待ちけり」という言葉の「待ち」に由来する。小沢蘆庵は、

よのつね待つといふことは、花みつ、人まつ、もえても春をまつなどやうに、すべて未だこぬをまつといふなり。此歌にては、人をまちつけたることをいへり。詞の定まらぬ事かくの如し。

と、この歌の「待つ」を「待ちつける」という意味であるとする。この「待つ」という言葉自体に「待ち得る」「待ちつける」という意味が内包されるとするのだが、もしこの歌の「待つ」という言葉にそのような意味があるとすれば、「井筒」の「待つ女」という語が「待ち続けた女」ということではなく「待ち得たる女」という意味で用いられている可能性も考える必要がある。なお「待ち得る」「待ちつける」という言葉は、ここでは「待った結果、相手帰ってくる」という意味で共通していると考える。

この歌の「待つ」を「待ち得る」「待ちつける」という意味で理

解することは世阿弥以前に既に「知頭集」「冷泉抄」に見られるのである。まず「知頭集」では、

その心には、花をばよまず。我をば、あだにさだまらずといふそらことをいひつけて、うとみたりしかども、さだまりたる心なればこそ、けふまでおともせず、ひとりありて、もとのおとこをば、まちつけたれ、とよめる也。これをそへ哥とは申なるべし。

と、この「待つ」を「まちつけたれ」と理解している。同様に「冷泉抄」においても、

又説云、年にまれなる有常が娘を、もとあだなると業平いひたるが、あだならば、かくまれ成人をばまたじ、三年を待つければと云也。

と、「知頭集」と同じ解釈をしている。「知頭集」「冷泉抄」のいずれもがこの「待つ」を「待ちつける」と解釈していることは、世阿弥当時「徒なり」との歌が、有常娘が業平の訪れを「待ちつけ」て詠まれた歌という理解が一般化していたことを物語っているだろう。つまり、世阿弥当時、有常娘は業平を「待ちつけ」て、もしくは「待ち得」てこの歌を詠んだことに依って「待つ女」と呼ばれたと考えることが出来るのである。

#### 四、世阿弥当時の「有常娘」像

しかし、それ以外の段において、当時の有常娘像がやはり「待ち続ける」女であるならば、「井筒」の「待つ女」を「待ちつける」「待ち得たる」女であると考えられる説は取りづらくなる。

そこで次に、「井筒」に引用されていない段まで含めて、当時の「有

常娘」像について考えてみたい。すると世阿弥当時までは、有常娘が源氏物語の紫上に匹敵する業平の「正妻」とらえられていたことが浮かぶのである。まず「知頭集」<sup>19</sup>では、業平の妻を

されば、えたるところの女、三千七百三十三人也といへども、きく人みちにふけりぬべき女ばかりをえらんで、わづかに十二人を、このものがたりにはあらはしかきたる也。

と三千七百三十三人とし、そしてその妻の中の「きく人みちにふけりぬべき女ばかり」十二人を選んで伊勢物語に書き記したとする。そして、その十二人のうち「第一二ハ雅楽のかみ紀有常がむすめ。」<sup>20</sup>と、有常娘を業平の妻の第一番に挙げているのである。「知頭集」はその理由を以下のように記す。

二条・五条の皇后、そめどの・齋宮などはまことに色ごのみのしわざありがたく侍り。そのほかの人は、なにの得も面目もあるべしともおぼえぬを、かきいれたる、心えがたし。まづ第一二いりたる有常がむすめ心えず。かのありつねと申は、中納言名虎の一男、わづかに近江権大掾たりしもの也。かれがむすめ、なにの利益名聞にかきたるぞ。おぼつかなし。

風、一切のものに、はじめなくしておはりある事なし。(中略) 業平この道をたづねんとて、みちをならひえたりし事、この女にあり。されば、この女は、心つきぐさにして、あだをなす時もありしかど、恩をそむきれいなければ、廿余年かれはてざりし女也。よて、このうちにもらさじとかけるなり。

「知頭集」は伊勢物語が有常娘のことを業平の妻の筆頭として書いた理由を、まず業平が好色の道を習い初めた最初の妻が有常娘であったためとする。そして有常娘は「あだをなす」時もあつたと記す。しかし、「恩をそむく」ことがなかったたので「離れ果てざりし女」

であったと言う。有常娘は二条后などと異なり身分は低かったが、業平の「幼なじみ」で最初の妻であり、しかも「離れ果てざりし女」であったことから多くの業平の妻のうち「第一にいりたる」資格があったのである。世阿弥時代、有常娘には業平と「離れ果てざりし」女としてのイメージが確かに存在した。

この点でも有常娘を、業平の正妻としてとらえる見方は、世阿弥の時代には一般的な理解であったと考えてよい。有常娘は、業平の帰りを「待つ」期間を過ごしたこともあるが、生涯を通じた場合には「待ち得たる」女として理解されていると言える。

このような理解は冷泉家流の古注釈にも見られる。二四段より最後の段である四一段を「冷泉抄」は業平と有常娘のこととして理解する。

女はらからとは、有常が娘二人也。○ひとりはいやしき男もたる、まづしきとは、業平がつまの妹なり。(中略) ○あてなる男もたるとは、業平なり。彼妻の姉なり。(中略) ○哥に、紫の色こきとは、紫は女の名なれば、妻を色ふかく思ふ時は、其ゆかりまでもなつかしといふ也。

この段を、「妻を色深く思ふ時は」とあるように、業平が有常娘を深く愛していたことを背景にすると理解しているのである。「冷泉抄」も、「知頭集」と同様、有常娘と業平の夫婦関係は何回も危機を経ながらも、その度に業平の情愛は回復されることで、有常娘を「待ち得たる女」としているのだが、このような理解は世阿弥時代の有常娘の一般的な理解だった。

まとめて言えば、世阿弥当時の伊勢物語理解における有常娘像は、業平の幼なじみであり、生涯に渡った「正妻」であり、お互いに浮気をして疎遠になったこともあったが、歌を媒介として愛情を回

復し、業平と添い遂げた女性であると考えて良からう。その意味で有常娘は業平の妻と考えられた女性の中で身分が低かったにもかかわらず第一の妻とされ、業平から打算的な愛情でなく真に愛された最も幸福な女性と理解されていたと言つてよいだろう。

## 五、「井筒」における「有常娘」

『井筒』の主題を考える上では、世阿弥時代の伊勢物語理解を抜きにしては考えられない。しかしながら、世阿弥時代の伊勢物語理解が完全にわかったとしても、それで『井筒』の主題が明らかになるわけではない。

それは一つには世阿弥が決して素材のままに書く作者ではないことによる。さらに一つには『井筒』成立後も時代によって伊勢物語の理解は変化しており、各時代の人がその時代の伊勢物語理解を念頭において『井筒』を鑑賞し、主題を理解してきたことによる。

古注釈を通じて見た、当時の伊勢物語理解から言えば、有常娘は「待ち得たる」女である。では「井筒」の詞章に視点を移して考えた場合、この有常娘を生前・死後を通して業平を「待ち続ける」女ではなく、生前は業平を「待ち得たる女」であると解釈することが出来るだろうか。「井筒」の舞台の進行に沿って詞章を吟味する。

まずワキの登場の詞章は、

ワキ さてはこの在原寺は、いにしへ業平紀の有常の息女、夫婦住み給ひし石上なるべし、風吹けば沖つ白波竜田山と詠じけんも、この所にての事なるべし

である。ワキは有常娘の物語を「昔語」として語り、「風吹けば」の歌で二人の物語を代表させる。西村聡氏は、

ワキ僧すなわち観衆は、業平と有常娘の二人を、「風吹けば」の歌を媒介とした愛の復活によって記憶しているものであり、そのなつかしいヒーローとヒロインとともどもとむらおうとするのである。

と、観客がこの有常娘と業平の物語を「愛の復活」の物語と考えていたとする。中世において有常娘が「待ち得たる」女と理解されていたとするならば、これはまさに「愛の復活」の物語であり、そのような伊勢物語理解を背景にして『井筒』全体のモチーフを考えるならば、妥当な見解と思われる。

シテの登場の詞章は、

忘れて過ぎし古へを、忍ぶ顔にていつまでか、待つことなくて  
ながらへん、げになにごとも思ひ出の、人には残る世の中かな。  
となる。この「待つことなくて」の本文は車屋本など下掛り系では「待つことありて」となる。下掛り系の本文の解釈をとれば「いつまで、待ち続けるのだろう」となる。夜毎に業平の墓に詣で、成仏への願いと業平との再会の願いと両方の願いを持つシテは、確かに「待ち続ける存在」であり、下掛り系の「待つことありてながらへん」はこのようなシテの現在の心境を述べた詞章として納得できる。しかしながら、上掛り系の本文「待つことなくてながらへん」であれば、『いつたいつまで、「待つ」、すなわち「待ち得たる」ことがないままにこの世にながらえるのだろう』というシテが生前業平を「待ち得たる」幸福な過去を踏まえての、死後「待ち続けている」亡霊のなげきと見ることが出来るのである。この意味で上掛り系の「待つことなくて」の本文が、ここでは本来の詞章のように思えてならない。

業平の高安通いが解消した時の有常娘の心情について述べた詞章<sup>27</sup>

は、

シテ 風吹けば沖つ白波竜田山、地 夜半にや君がひとり行  
くらんと、おぼつかなみの夜の道、行くへを思ふ心とけて、よ  
その契りは離れがれなり、シテ げに情知る泡沫の、地  
あはれを述べしも理なり。

となる。この部分は生前の業平と有常娘の恋物語とであり、有常娘がこの世に執着し、永遠にさまよう原因となる「思い出」が語られている。伊藤氏はこの部分に「待ち続ける女の姿」を読みとつておられるのだが、ただこの詞章は、シテが待つ「辛さ」について触れていないということに注意する必要があるだろう。「行くへを思ふ心とけて、よその契りは離れがれなり」という詞章からは、夫の心を「風吹けば」の歌でとどめ、「心とけ」たこと、つまり歌によって相手の情愛を引き戻すことが出来たという女の喜びが読みとれるのである。この高安通いの部分は、有常娘が業平を「待ち得たる」幸福な女性であることを前提に語っていると言つてよい。

次にクセにおいて「井筒」という曲名の由来ともなる「幼な恋」が語られる。この部分を引用すると、

地 (中略) 心の水もそこひなく、移る月日も重なりて、大人  
しく恥ぢがはしく、互に今はなりにけり、その後かのまめ男、  
(中略) シテ 筒井筒、井筒にかけしまろが丈、(中略) 互に  
詠みしゆゑなれや、筒井筒の女とも、聞こえしは有常が、娘の  
古き名なるべし。

となる。この部分も、幼いもの同士的情愛を描きながら、「恥ぢがわしく」いったんは「妹を見ざる」期間を過ごしたとされている。しかしそれも「筒井筒」の歌を詠み合うことでもとの情愛をとり戻したとする。サシの高安通いの部分と同じく、いったんは別れの危



機があり、それが歌によって解消されると読むことが出来る。

後場冒頭<sup>29</sup>には有常娘の生涯が凝縮した形で述べられている。これを引用すると以下のようになる。

シテ 徒なりと名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり、かやうに詠みしもわれなれば、人待つ女とも言はれしなり、われ筒井筒の昔より、真弓槻弓年を経て、今は亡き世に業平の、形見の直衣身に触れて

その部分をいま試みに訳すとすれば、

「あだなりと……」この歌を詠んだのも私なので、この歌の「待つ」という言葉から、「人待つ女」とも言われたのです。そういうのも自分は（お互いに恥かわしさが生まれてあわない時期を過ごした）筒井筒の幼い恋いの昔から、（いま新枕を交わそうとする日になって、折よく帰ってきた業平から）「真弓槻弓」の歌を詠みかけられて（復縁を迫られた経験もあり、様々な夫婦の危機を経験する年月を過ごしましたが、最後には業平の訪れを待ち得ることができたからです）……。

となる。ここで語られる有常娘の述懐は、業平との別れの危機を何回も迎えながらも、そのたびに夫の愛を「待ち得たる」日々であったことが語られていると読むべきだろう。シテは「月やあらぬ、春や昔と詠めしも、いつの頃ぞや。」という形で、「昔」を懐古する。八嶋正治氏は、この部分を「女が転身した所の業平が、そのような歌を歌った時分の頃の事を懐古している」と解釈する以外、解釈のしようがない」と言われる。しかしながら、業平が二条の后を恋うという、有常娘の純愛に水をさすような言葉がなぜ有常娘の口を通して語られるのか、八嶋氏の説からは明確な説明が見受けられない。

それに対して西村聡氏は、「人待つ女」の苦悩のにじむ回想である。と、有常娘自身の回想であると解釈する。しかし、ここにも、もしそうであれば当然抱いてよい、業平に対しての恨みが語られていない理由については言及されていないのである。

これは、前場で語られた有常娘の「昔」が、何回も結婚生活の危機を経ながら、歌によって愛情をとどめたという内容であったことを想起すべきであろう。有常娘の「昔」として、前場では「昔在原の中將、……」で始まる結婚の危機と愛情の復活の話（クリ・サシ）と「むかしこの国に……」で始まる幼な恋とその成就の話（クセ）の二つが語られていた。後場でも、前場と同じモチーフが、題材を変えて同じ順番で用いられていると考えられる。つまり、まず結婚の危機と愛情の復活の話が、前場の高安通いに対して後場では四段の業平が二条の后に通った和歌を題材として語られ、次に幼な恋の話が、前場と同じ二三段の「筒井筒」の話と一段の「初冠」の話を併せる形で語られていると読むことが出来る。古注釈に現れる世阿弥当時の理解においても、業平が二条后に通ったことは、業平と有常娘との結婚生活にとって最大の危機であったと理解されていた。

この場面が「昔」を返す場面である以上、まず業平と有常娘との結婚生活に一時は破綻の危機があったことを、有常娘に乗り移った業平が「月やあらぬ」という歌を詠む事で示し、その後<sup>30</sup>に

シテ 筒井筒、 地 筒井筒、井筒にかけし、 シテ まろが  
文 地 生ひにけらしな、 シテ おひにけるぞや、 地 さ  
ながら見みえし、昔男の、冠直衣は、女とも見えず、男なりけり、業平の面影

と、有常娘と業平が一体化したことが示されるという構成になっているとみるべきであろう。

シテの「おひにけるぞや」の「おひ」については二通りの解釈がある。表章氏は、この部分を「老い」と校訂され、『生ひにけらしな』と詠んだのだが、そうした若い頃も過ぎ、やがては年老いてしまったのであったよ』と、シテの老いの嘆きを述べた詞章と理解される。これに対して伊藤正義氏は、この部分を「生ひ」と校訂され、「もう大きくなったようだよ、お互いに一人前の大人になったんだね、という、最も幸せだった時の回想であるべきで、ここに老いへの詠嘆の意はあるまい。」と、業平と有常娘のお互いに生長した時期の回想と理解されている。表氏はこの「おひ」を有常娘が「老い」と捉え、伊藤氏は業平と有常娘が「生ひ」と捉えられている。

ここではまず、シテがなにを「『おひ』にけるぞや」と述べているのが問題となる。私は、この詞章の直後に「さながら見みえし昔男の冠直衣は」とあることから、業平と（業平に見えている）有常娘であると考えられる。有常娘が身につけた業平の「冠直衣」は二人が幼く「井筒」に寄りてうなる子の友だち語らひて「水鏡に面を写していた時期の業平の衣服ではない。「冠」とある以上は第一段の「初冠」を踏まえていると考えられ、業平の元服後の衣服をさしていると言ってよいだろう。そして「知頭集」「冷泉抄」は第一段の「男」を業平、「女はらから」を有常娘姉妹のこととしている。業平が有常娘に「初冠」をして求婚したという理解は世阿弥当時確かに存在した。つまりシテが「おひにけるぞや」と言っているこの場面は、業平が冠直衣をつけて「おひにけらしな」という求婚の言葉を贈った場面の再現であると考えて良い。ここで「老いへの嘆き」をとるのは他の部分にシテが容色の衰えを嘆く詞章がないことから不自然で、伊藤氏の言われる通り「生ひ」であろう。そして「生ひにけ

るぞや」は、『生ひにけらしな』とあなた（業平）が詠んだように、あなたの姿は、幼いころ井筒に寄って水鏡に写った姿と異なり）立派に生長なさったのですね、（私（有常娘）に逢わない間に。今まさにあなたの冠直衣姿を見るとそれがはつきりわかります）という、逢わない期間を「待ち得」て業平と結婚した時の有常娘の感慨であると解釈される。そして、業平に憑依されて一体となった有常娘の姿にこそ有常娘の生前の「待つ」結果として「待ちえたる」姿が再現されていることになる。

舞台上の亡霊の姿は確かに業平を「待ち続ける」姿である。しかしながら、シテは生前業平を「待ち得たる」経験があった。そしてその「待ち得たる」ことよって至福を感じていた。それゆえに亡霊になってもなお、「移り舞」を通して、業平と一体となる至福、すなわち「待ち得たる」至福を願い続けると考えてよい。有常娘は「頼む仏のみ手の糸、導き給へ法の聲」と言うように切に成仏を願っている。だが有常娘は「待ち得たる」至福をも永遠に願うことよって成仏できずにさまざまことになる。世阿弥は当時の伊勢物語理解を素材に「井筒」をつくる際に、有常娘が業平を「待ち得たる」物語から、有常娘が永遠に業平を「待ち続ける」物語を創造したのである。

「恥づかしや、昔男に移り舞」と、有常娘は業平の訪れに執着し「移り舞」を舞う自分を「恥づかし」と言う。車屋本ではこの部分を「なつかしや」とするが、どちらの場合でも有常娘は業平の訪れに執着していると言って良い。そして業平の訪れに執着する有常娘の姿は、仏法から見れば現世に執着する「罪深い」女性の姿である。従って能の通常のあり方からすれば、ワキの僧は当然罪深きシテを「用い」によって「浮かめ」ようとするはずであろう。ワキも名乗りの部分

では「いもせをかけて弔わん」と言うのだが、それ以降の詞章に弔いの言葉はない。その理由は「移り舞」によって業平を「待ち得たる」こと自体が有常娘の亡霊にとつて至福であるからで、有常娘の亡霊が妄執を持ちながらも苦しんでいる姿の亡霊ではないためと考へることが出来る。

『井筒』の有常娘は、業平と一体になったこの瞬間すでに、仏教的罪障を超越した情愛の女であることをみずから選んだと言つてよい。こうして情愛と成仏の葛藤のなかで情愛を選ぶといったところにこそ、宗教的主題を超えた『井筒』の主題が認められるのである。中村格氏が報告された、室町末期に行われていた十寸髪的面をつけ、翔りを舞う演出も、このような有常娘の業平を恋う執念と成仏への望みとの間でゆれる心の葛藤の強さを強調する演出と考えれば、主題に即した妥当な演出と言へるだろう。

## 六、『井筒』成立後の有常娘像

『井筒』は永享一(一四三〇)年一月成立の「申楽談儀」に「上花」の能として記載されることから、遅くともこの時までには成立していたと考えられる。この「申楽談儀」成立の三〇年ほど後、長祿四(一四六〇)年に一条兼良が「伊勢物語愚見抄」(以下「愚見抄」と略称する)を著す。「愚見抄」は、「知頭集」などの古注が、確實な典拠に基づかずに業平の通った女性の実名を挙げる態度を、業平中将のかよひ侍る女はをのづから物語の中に其名をあらはして侍るは申に不及。又代々の撰集などの中に其哥につきてま、作者をのせ侍る事あり。然を近古の末釈に一々に其名を顯し侍るいとおぼつかなき事なるべし。縦其世に生れあひたり共

か、るみそかわざをばあまねく人不可知。況數百年の後にをしはかりにいふべき事は、縦名哲の口伝たりと云共信用にたらぬ事なるべし。

と激しく批判する。「愚見抄」は古今和歌集の詞書など確実な典拠に実名を載せてある場合を除き、「男」「女」に実名を挙げない方針をとっている。これは当時としては画期的な考え方と言える。この考え方は「伊勢物語肖聞抄」などに引き継がれて行く。しかし「愚見抄」成立後もしばらくは、伊勢物語を業平が実際に体験した恋愛に基づいた物語と理解する考えは勢力を持っていたと考えられる。尾田敬子氏は、伊勢物語中の人物に実名を宛てる注釈態度をとる「伊勢源氏十二番女合」の成立時期を「可能性としては十五世紀後半から十六世紀にかけての時期が大きいのではないだろうか」と言われる。しかしこの時代を過ぎると、伊勢物語の「男」「女」に実名を当てて鑑賞することは徐々になくなった。これと同時に『井筒』に描かれている「有常娘」像も、本文によってのみ考えられるようになった。このため「有常娘」が中世の「伊勢物語」の世界で生前業平を「待ち得たる」幸福な女性であったと理解されていたことは次第に観衆の記憶から遠のき、有常娘が業平を「待ち続ける」姿のけなげな美しさのみが『井筒』の世界とされていったのではなからうか。

### 注

- (1) 中村格「室町末期の女能——『井筒』の場合——」『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学 第二五集』昭和四九年一月発行、二三一頁上段
- (2) 堀口康生「待つ女——『井筒』の手法」『図説 日本の古典5 竹取物語・伊勢物語』昭和五三年八月発行、一九五頁
- (3) 伊藤正義『謡曲集 上』新潮日本古典集成、昭和五八年三月発行、新潮社、四〇三頁下段—四〇四頁下段

- (4) 八嶋正治『世阿弥の能と芸論』昭和六〇年一月発行 三弥井書店 四八四頁
- (5) 西村聡『人待つ女』の「今」と「昔」——能「井筒」論』皇学館大学紀要18』昭和五五年一月号 一〇六頁
- (6) 『伊勢物語の研究』(資料篇)片桐洋一著 昭和四四年一月発行 明治書院 四七〇頁
- (7) 同注6 一六三頁下段—一六四段上段(「わがせしがごと」を「わがせしかごと」に改めた。)
- (8) 同注6 三三五下段—三三六頁上段(「二の義。有常には」を「二の義有。常には」に改めた。)
- (9) 『鉄心斎文庫 伊勢物語古注釈叢刊 第一巻』片桐洋一編 八木書店 昭和六三年一月発行 六一頁
- (10) 同注6 五三〇頁上・下段
- (11) 同注6 三三六頁上・下段
- (12) 同注9 六二頁(この部分の考察については拙稿「伊勢物語古注釈と「井筒」——有常娘像の変貌」(椋山女学園大学研究論集 第二三号 第二部)平成四年二月発行)の三八—四〇頁と重なる部分がある。御参照頂けると幸いである。)
- (13) 『世阿弥 禅竹』所収 加藤周一 表章 日本思想大系 岩波書店 昭和四九年四月発行 二二三頁上・下段
- (14) 同注6 一八七頁上段
- (15) 金忠永「謡曲「井筒」考——本説を手がかりとしたシテ像の考察——」『文学研究論集』第10号 筑波大学比較・理論文学会 平成五年三月 一七頁
- (16) 「ふりわけ髪」『日本歌学大系 第八卷』佐佐木信綱編 風間書房 昭和四六年三月発行 一九七—一九八頁
- (17) 同注6 一五七頁下段—一五八頁上段
- (18) 同注6 三二五頁上段
- (19) 同注6 一一〇頁下段
- (20) 同注6 一一一頁上段
- (21) 同注6 一一一頁下段—一二二頁上段
- (22) 同注6 三四四頁上段
- (23) 『謡曲集 上』横道萬里雄・表章校注 日本古典文学大系40 岩波書店 昭和三五年二月発行 二七五頁

- (24) 同注5 九七頁
- (25) 同注23 二七五頁
- (26) 『謡曲集 上』野上豊一郎解説 田中允校註 日本古典選 朝日新聞社 昭和三二年一月発行 一八〇頁
- (27) 同注23 二七七頁
- (28) 同注23 二七七一—二七八頁
- (29) 同注23 二七九頁
- (30) 同注4 四六三頁
- (31) 同注5 一〇七一—一〇八頁
- (32) 同注23 二七九頁(「老いにけるぞや」を「おひにけるぞや」に改めた。)
- (33) 同注23 二七九頁 頭注二四
- (34) 同注3 一一〇頁 頭注八
- (35) 同注23 二七九頁
- (36) 同注23 二七七頁
- (37) 同注6 業平：一二五頁上段 有常娘姉妹：一二九頁上段
- (38) 同注6 業平：二九三頁下段 有常娘姉妹：二九四頁上段
- (39) 同注23 二七五頁
- (40) 同注23 二七九頁
- (41) 同注26 一八三頁
- (42) 『伊勢物語研究史の研究』田中宗作著 昭和四〇年一〇月発行 桜楓社 三二二頁上段
- (43) 「愚見抄」が伊勢物語の登場人物にどの人物を宛てたかについては、拙稿「伊勢物語古注釈に登場する人物」(椋山国文学) 第十七号 平成五年三月発行)を御参照いただけると幸いである。
- (44) 尾田敬子「伊勢源氏十二番女合」の成立基盤』『国語国文』昭和六〇年十一月発行 一〇頁上段
- 〔付記〕本稿は平成六年秋中世文学会大会発表をもとに改稿して作成したものです。終始御指導頂いた名波弘彰先生、学会に於いて御質問・御教示下さった天野文雄先生、伊藤正義先生、田口和夫先生、中村格先生、八嶋正治先生初め、お教え頂きました諸先生に心より感謝致します。なお本稿は平成四年度・五年度椋山女学園大学学術研究費助成による成果の一部となります。